

校歌鼎談

平成29年12月20日 於仙台市若林区文化センター
本校校歌作曲者 片岡良和先生，本校同窓会長 玉川勝義氏，本校校長 水口俊彦

《司会 青柳美花（放送部）》

ただいまより，平成29年度向陵学習発表会記念行事を開始します。

記念行事は「校歌鼎談」です。本校校歌作曲者 片岡良和（かたおか よしかず）先生，本校同窓会長 玉川勝義（たまがわ かつよし）さんをお迎えして，本校創設の沿革や本校校歌の成り立ちなどについてお話をいただきます。進行は水口俊彦（みずぐち としひこ）校長先生が行います。

では，3名の先生が入場されます。大きな拍手でお迎えしましょう。

（拍手）

それでは校長先生，よろしくお願ひします。

《校 長》

向陵学習発表会第3部です。校歌鼎談を企画いたしました。宿題になっていましたが，鼎談の意味を調べてみたでしょうか。2人で話をするのは対談，3人が鼎談，4人以上が座談ということですね。今日は3人で，校歌にまつわる話をしたいと思っておりました。

ではご紹介申し上げます。本校校歌の作曲者で，仙台駅東口にある見瑞寺（けんずいじ）の住職さんであります片岡良和先生です。先生，どうぞよろしくお願ひいたします。

（拍手）

それから，仙台向山高校の9回生で，今年7月に本校同窓会長に就任なさいました玉川勝義さんです。どうぞよろしくお願ひいたします。

（拍手）

今紹介しましたように，片岡先生は平たく言うとお寺のお坊さん，住職さんです。そのような方がなぜ音楽を志したのか。先生は，今宮城県や仙台市ではかけがいのない作曲家・音楽家の1人なのですが，どうしてそのような道に進まれたのか，まずはその辺りから話を聞きたいと思っておりました。

先生，お寺にお生まれになったのですね。

《片 岡》

そうです。寺に生まれたのです。子どものときからお経を習わせられたのですが，向かい合ってやらなくてはならない。お経を何度も聞きながら，拍子を取りながらやるのです。皆様方が思っているお経とは違ひまして，浄土真宗には節がございます。長唄みたいなものがあったり，上げ下げがあったり，同じものでも儀式によって曲の動かし方が違うのです。それで，細かく今日は何，今日は何と，同じものでも違う形でお経を習うので，どうしても音には敏感になるのです。

雅楽をご存知でしょうが，越天楽（えてんらく）※1というものもございますね。あれも拍

子が違います。例えばト長調でやるものとイ長調でやるものとは、節が違うのです。大体定型の本当の雅楽ではないのですけれども、人は「いろはにほへと ちりぬるを…」と言葉をつけたのですが、あれは違うのです。

本当のやる気というのではなく、いやだけれどもおしりを叩かれながらやるのです。そういう癖がついていますから、何でも音を聞くと真似をするのです。

本当は、学校では美術、絵を描いていたんです。日本画を。それがいつの間にか音楽になっていました。

《校長》

大学は京都にあります大谷大学、これは仏教の大学です。そこに入学されたのですが、その後国立音楽大学※2に行かれていますね。何かきっかけでもあったのですか。

《片岡》

京都にいたときは、声明（しょうみょう）※3を学んでいました。その先生が清水 脩（しみず おさむ）先生※4という方なのですが、皆さんご存知でしょうか。清水先生は、大阪外語大学のフランス語専攻を出られている。ですから、音楽からはやや逸れた方ですが、正式に作曲家に変わられていた。そこで、先生から西洋音楽を習いました。清水先生もお寺の息子だったのですが、そういう関係から音楽のほうに来たのです。

京都が終わってから東京に来て、本当は東京芸大※5を受けたのです。芸大の作曲科を受けたのですが、まだ今でも覚えていますけれども、会場の形はこのホールと同じでした。このような部屋が待合室になっていて、その辺がバイオリン科、こちらのほうが歌、後ろのほうに楽理や作曲科というように配置されていました。私が芸大を受けたときは作曲科はそちらの角のほうの待合の部屋になっていて、そこに座って待っていたら話しながら受験生が2人入ってきました。その2人の会話は、去年の問題はこうだったなどと話をしていました。1人は5回目、もう1人は3回目の受験だったらしいです。私は、今回1回目の受験でしたが、その話を聞いてこれはもうだめだと思いました。そのころ、ちょうど国立音楽大が入学試験をやっていたので、すぐそちらに乗りかえて、国立の作曲科を受けたのです。課題曲はピアノも芸大のものを弾いたんですね。そしたら他にも同じピアノの曲を弾いているやつがいたんです。その人も芸大はだめだったなどと言っていました。そういうことがあって、国立音楽大に入りました。

《校長》

音楽大学の受験についての話でしたが、東京芸大では受験生が奏楽堂というこちらのようなホールに集められているときに、他の受験生の話を聞いて、芸大はあきらめて国立音大に進学したという話でした。

《校長》

玉川さんは、片岡先生とはどのようなお付き合いだったのでしょうか。

《玉 川》

先生とはもう昔からのお付き合いです。三十数年前、仙台市制88周年のときに『仙台賛歌』がつけられました。そのときに仙台市民会館で仙台賛歌をお披露目したのですが、私は歌のほうで出演しました。そのときの指揮をされたのが、片岡先生です。まだ宮城フィルハーモニーの頃ですけれども、先生がものすごく格好いい指揮をなさった。その頃からの、30年いやもう40年近い感じですよ。それから先生の仲間内の先生方、岡崎光治先生※6はじめ、片岡先生の先生でもある福井文彦先生※7にも私が教わったという関係から、先生とはご縁があったという形です。



《校 長》

玉川さん、高校時代は音楽部でしたよね。

《玉 川》

音楽部で合唱をやっていました。それから、大学に進学後もグリークラブという合唱をやる団体がありましたから、そこで歌いながら先生方とも一緒に活動させていただいたという感じですね。ですから、大学時代は片岡先生とも岡崎先生ともよく飲み歩くという感じで、音楽を教わるというよりも飲むのを教わるという感じでした。

《校 長》

玉川さんが仙台向山高校在学中、部活動は音楽部で合唱をやられていたとのことですが、当時は吹奏楽部と音楽部が一緒にあったということですね。

《玉 川》

顧問の先生は荒井富雄先生※8で、両方兼部で指導されていた形です。

《校 長》

片岡先生、先生がおつくりになった本校の校歌ですが、入学してくる生徒や転勤してくる先生方が一番最初に始業式や入学式で耳にすると、「とても美しいメロディですね」と言うのです。そのメロディをつくっていくことについての先生のお考えをお聞かせいただきたいと思います。もう四十数年前の話なので、本校の校歌を作曲した当時のことはたぶんご記憶にはないと思うのですが、ふだん歌を作曲なさることについてはどのようにお考えなのでしょうか。

《片 岡》

よくいろいろな校歌を聴きますけれども、素人さんがつくる校歌が結構多いんですね。ですから、歌詞を外してメロディだけを聴くと、よく子どもさんがこれを歌っているなどという曲が正直なところあるのです。かろうじて歌詞がついているからメロディをなんとか歌える、というような校歌があるのです。ですから、校歌は、歌詞がなくてもメロディを歌えること、歌詞とメロディがマッチしているかどうかということ、アクセントだとか音の高低もですね。そして、それらがきちっと整理されているのか。校歌というのは、それらがしっかりしているものであると私は思っていました。

また、私の先生でもある国立音大の高田三郎先生※9は、日本語にうるさかったですね。先生からは、「校歌は後々まで残るもの、つくった者が死んだ後にも歌われ続けるものである」、「へんちくりんな校歌だなだとか誰がつくったのだなどと言われたいないように」、などとしょっちゅう言われていました。そういう小うるさい私の先生の仕込みがありましたので、歌詞とアクセント、それから高低ですね、言葉の高低、そういうものがきちりしたものを作曲をするようにしています。そして、いろいろと候補となる曲を書くのです。数多く書いて、どれがふさわしいか、それから形だけでなく1番・2番・3番と歌っても変ではないメロディになるようにします。ですから校歌をつくるということは、時間がかかるんですね。以前、私はテレビやラジオの音楽もつくっていたのですが、テレビやラジオの音楽は消耗品ですから、さっさと書いていきます。そうですね、一晩に30楽曲ぐらい書くんですよ。そのようなものと校歌とは、違う音楽であるという頭がありましたね。後世に残る、それから歌っていても歌いにくい音楽ですね。当時の校長先生とは、だいぶ言葉のこともやりとりしながら書きました。この前こちらの校歌をもういっぺんじっくり見たら、今になるとここはこうしたいなというところも出てはきましたが、私の依頼された校歌の中では、こちらの校歌はABCがあったらAのクラスでございます。どうぞ、安心していただいて結構です。

《校 長》

よかったですね、ABCのAランクの校歌だそうですね。
片岡先生に前にお会いしたときに、校歌には格式が必要だと言う話も伺っていたのですが、その辺のお考えを教えてください。

《片 岡》

私は音楽大学に入る前に、芥川也寸志さん※10と懇意でした。皆さんご存知ですか、芥川也寸志さんという方を。芥川龍之介さんの息子さんなんですよ。皆さんも知っている、あの『きゅっきゅっきゅっ』という歌、きゅっきゅっきゅっとかくつみがこうという歌、あの曲を書いた人です。あの方は東京芸大に在学中、兵隊に取られまして、軍楽隊にいました。そのようなこともあって、行進というのを非常に重要視していたんですね、歩き方というのを。それが頭にはあったのだけれども、山梨の小学校から校歌を頼まれて、ちょっと変わった曲を書きたいと言うので4分の3拍子の曲を書いたんだそうですね。校歌は大体4分の2拍子か4分の4拍子のどちらかですよ。そうしたら後で校長先生から電話が来て、どうもあなたにつくっていただいた校歌は歩みにくくてしょう

がないという話があったそうです。そりゃそうです、3拍子で書いたのですから、運動会
のときにはちぐはぐな行進になってしまう。それで、歌詞そのまま曲を書き直したとい
う話を伺ったのです。校歌は4分の4で、必ず歩くことを考えて書く。歩くことだけでな
く、式典でも演奏するので荘重なところもなくはだめだ。それが非常に頭にあったので
す。こちらの校歌を書くときには、そのことを思い出しました。曲をつくるときに、一番
最初に思い出したのです。そういうことを土台にして書いたので、こちらの校歌は歩きに
くいことはないと思います。

ただね、仙台に1曲だけ4分の3拍子の校歌があるのです。八木山の奥に新しく出来た小
学校（仙台市立芦口小学校）の、さとう宗幸さんが書いた校歌、あれは4分の3なんです。
いっぺん運動会するとき、どういふ歩き方をするのか見たいなと思っていました。宗さん
にもそれを話したことがあるんですけども、「そうかな」なんて言っていました。校歌
を全国から集めて調べたら、いろいろおもしろい校歌だけを集めた読み物が出来ると思
うぐらいです。歌詞も同じですね。本当に変な歌詞の校歌もありますが、こちらの学校の歌
詞はそうではないですね。曲をつくるときに何遍も歌詞を読み、おかしいところは直して
もらうようにしています。アクセントもなるべくそろうようにしてもらうとか。

《校 長》

玉川さん、向山高校の1桁台の卒業生、1回生だとか玉川さんは9回生ですが、どのよう
に校歌というものを考えていましたか。

《玉 川》

向山の場合は、校歌の歌詞を先輩方1回生の皆さんから公募したのです。最終的には、初
代校長の鎌本校長先生の作詞になりましたけれども。第一応援歌にせよ第二・第三にせよ、
逍遙歌、応援歌いろいろありますけれども、すべて先生方と生徒方が作詞作曲したものを
集め、選んだのが向山らしいと思っていました。われわれが1年生のときは、誰々先生が
作曲した逍遙歌ですよというふうに聞くことができました。第一応援歌の作曲は、もう亡
くなられてしまいましたが、それこそ1回生の方で向山から東京芸大進学第1号の伊沢長
俊（いさわ ながとし）さんがつくられたのです。身近にそういう方がいらっしやいまし
た。もちろん片岡先生も鎌本先生も面識のある先生でしたので、校歌も身近な方が一生懸
命知恵を出し合ってつくった親しみのあるものだと感じておりました。

《校 長》

私も長いこと高校の教員を勤めていますけれども、校歌というものに対して、時代時代
で生徒や社会的な捉え方が変わってきたかなと思う部分があります。私が向山に最初に赴任
した頃は、校歌は普通に、ただ普通に歌っていた。ところが、平成も10年を超えて、1
1年12年頃に、生徒たちが校歌について非常に思い入れをもちはじめたことに気づきま
した。23、24、25回生ぐらいからでしょうか、校歌の歌い方や校歌に対する意見が
変わってきたなと思うようになりました。再び向山に着任し改めて校歌を聞くと、昔より
も更に気持ちが入って校歌を歌えているのではないかと思いました。社会的に校歌の役割
が変わってきているのではないのでしょうか。

《玉 川》

そうですね。やはり、われわれ同窓生は卒業してから歌うと懐かしいものです。ご縁があってこのような重責をいただきましたが、毎回卒業式では声高らかに歌わせてもらっています。私の中では、小・中・高・大学の校歌の中では一番気に入っている校歌かなと思っています。私の通った小学校・中学校は古い伝統のある学校でしたので、歌詞が何を言っているのかわらず、作曲も昔の方がされた校歌でした。高校に入って入学式で校歌を聞いたときに、校歌の書かれているボードに私の知っている作曲者の片岡先生の名前が入っていたので、校歌の歌詞にもある心の郷ではありませんが校歌の中では一番親しみのあるものになったような気がします。皆さん今は校歌斉唱で歌うけれども、だんだん歳とともに50代60代となってくれば、そういうのが懐かしむ心になっていくのかなと感じますがね。

《校 長》

生徒たちも特に3番が大好きで、1回離任式を経験してあの校歌で送られた身としては、「星うつり人かわるとも」といった歌詞にしんみりし、またそのメロディも非常に染みるいい歌だなと思っておりました。片岡先生、先生に本校の校歌の作曲をお願いした経緯のご記憶はありますか。誰がいつご依頼したのでしょうか。

《片 岡》

どこで、どういういきさつでというのは忘れちゃったね。でも、東京から戻ってきてすぐだったことは覚えています。

《校 長》

初代校長の鎌本先生とは面識はあったのですか。

《片 岡》

ええ。宮教大のところにあった教育研修センターに、研修の講師として3年間通ったのです。鎌本先生とは、そういうところで面識はありました。そういう関係ですね。

《校 長》

片岡先生、先生が校歌を作曲なさる前に、今の向山高校の地は何回か訪れたことがあるのですか。

《片 岡》

ええ、あそこは懐かしい場所なのです。だから、作曲をするときに気合いの入れ方もちょっと違っていました。(笑)昔はここに、女専、仙台女子専門学校があったのです。昔の学校制度は、大学、専門学校、そして中学校がありました。中学から大学に進学するには、必ず高校に行きました。この地域には(旧制)二高があったのですけれども、中学から二高に行って、そこから東北大とか東大だとかに行くのですね。私立の場合には、中学、そ

れから大学の予科に行って本科に進む，ちょうど今の高校と大学が混ざったようなものがあつたそういう時代でした。ここには女専があつたのですが，なくなりましたね。

《校 長》

次に，電波高専が入りました。女専が東北大に吸収合併されたのです。

《片 岡》

それで，電波高専が次に入ったのですか。

電気通信の専門家を養成する学校が今の向山の場所にありまして，その後が向山高校ですね。実は，電波のときによく行っていたんです。何で行っていたのか，今は忘れてしまいましたが。懐かしい場所だったのです。

そういえば，桜がきれいだったという意識が残っているのですけれども，今も桜はありますか。

《校 長》

あります。

《玉 川》

あります。まだ，少しあります。

《校 長》

少し減ってはしまいましたが。

《片 岡》

昔あそこは，桜が有名でしたからね。そのようないい場所なのです。学校によっては，変なところにある学校もありますからね。ですから，皆さんは本当に恵まれていると思えますね。やはり，環境が一番ですね。環境のよさを詠んだ漢詩が結構ありますが，漢文にあるような環境の下で勉強しているわけですからね。向山の地で勉強できることに幸せを感じなくてはだめだ，申し訳ないくらいだと感じなくてはならないと私は思うのです。

《校 長》

見晴らしもよいですね。

《片 岡》

そうですね，見晴らしもよいですね。

《校 長》

ではここで，片岡先生が四十数年前におつくりになった校歌を，全校生徒で演奏したいと思えます。では，合唱の準備をいたしましょう。

片岡先生，よろしく願いいたします。

♪校歌合唱♪



《校 長》

片岡先生，率直なご感想をお願いしたいのですが。

《片 岡》

涙が出てきました。皆さん上手ですね。フィレンツェに行ったときに、ドゥオモ（ドーム）（サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂）で歌ったときの印象が目に浮かびましたね。一番感心したのがブレスの場所ですね。ここで切るんじゃないかと思う場所があったのですが、よく切らなかったですね。ブレスをしなかったところで、ドゥオモで歌ったときの残響がパーッ思い出されて、それで涙が出たんです。いい学校の曲を書かせていただいたことを本当に感謝いたします。

《校 長》

フィレンツェのあのドゥオモを彷彿させるという、最高の評価を私たちはいただきました。先生，本当にありがとうございます。

《片 岡》

私の先生からは、「作曲をして歌を出したら，その曲はもうおまえのものではないよ。」と教えられました。みんなのものになる，そのことを実感させられました。本当に皆さんありがとうございます。

《校長》

玉川さん、いかがでしたか。

《玉川》

私も何年ぶりですかね。吹奏楽部の男子生徒に、パートは何と聞いたらベースとのことだったので、せっかくですからベースを久しぶりに30年以上ぶりに歌わせていただきました。譜面なしで暗譜で歌うことが出来まして、やっぱり、懐かしいですね。このように合唱で歌うというのも懐かしいですし、やっぱりこの学校でよかったなとすごく感激をいたしました。まして、片岡先生の前で恥も何もなく御前で歌わせていただけたことに非常に恐縮をいたしております、申し訳ありませんでした。

《校長》

私も音楽の教員なので、音楽に長年取り組んできました。歌は命だな、心を表現するなということを実感しながら指揮を執らせていただきました。

《校長》

校歌鼎談も最後に近づいてまいりました。先生方から一言ずつ、今の向陵生に激励をいただいて終わりにしたいと思います。まず、片岡先生、ぜひ激励をお願いします。

《片岡》

激励というよりも、皆さんがこう並んでいるお姿を見て、この学校の校風をふっと思い描くことが出来ました。皆さんが同じ高校生であると言うよりも、同じ学問を学んでいる仲間でありその一体感が感じられました。よく校風を表していると思います。本当のことを言うと、私が依頼されたときは校歌を甲子園で歌ってもらいたいという願いもあったのですが、今日はそんなことはどうでもよいと思いました。皆さんこのまま伸びていって、社会のために頑張ってください。皆さん、ノーブル※11な感じがするのです。しっかりと、そして上品な学校なのです。ここの高校の校歌をつくらせていただいたことに対して、本当にありがとうという感じですよ。

《校長》

ありがとうございます。では、玉川さんお願いします。

《玉川》

今日は、校歌について、尊敬する片岡先生をお迎えして高いところで話をさせていただきました。皆さんは卒業すると同窓会に入会するわけですが、一万人を越えた同窓生はみなこの校歌を歌って卒業し、今も各所で活躍しています。皆さんも必ずや活躍するであろうから、今日は活躍して下さいとはあえて言いません。私たち3人の師であり、また仙台の音楽界の祖とされる福井文彦先生がいつも「歌に命あり、胸に光り持て」と言っておりました。やはり「校歌に命あり、胸に光り持て」だと思えます。皆さん、希望の光を持って進んで下さい。将来の同窓会においても、皆さんに話をさせていただく機会もあるでしょう。

希望を持って夢を持ってそれに邁進して下さい。

《校 長》

大変お忙しい中ですね，今日も午前中ご葬儀があったりそういったお仕事をなさっている中，片岡先生に駆けつけていただきました。また，玉川同窓会長さんにおかれましても，お忙しいところわれわれのために時間を割いていただきました。1時間弱の時間ではありましたが，学校としては非常に得難い時間をいただきました。片岡先生，玉川さん，本当にありがとうございました。大きな拍手で感謝を申し上げたいと思います。

(拍手)

《校 長》

先生，ここで生徒代表から花束を贈呈したいと存じます。

《生徒会長 永井珠李》

このような素敵な校歌をつくっていただき，本当にありがとうございます。私たち在校生，そして未来の後輩たちを含め，これからもこの校歌を大切にそして心をこめて歌い続けたいと思います。今日は，本当にありがとうございました。

(花束贈呈)

(拍手)



以 上

「校歌鼎談」脚注

※1 越天楽 … 雅楽の演目である。舞は絶えて曲のみ現存している。雅楽の曲のなかで最も有名な曲である。楽器は主に8種類。管楽器、弦楽器、打楽器に分かれている。

※2 国立音楽大学 … 東京都立川市柏町5-5-1に本部を置く日本の私立大学である。1950年に設置された。大学の略称は国立音大（くにたちおんだい）、国音（くにおん）。大学名は、1970年代まで国立市にキャンパスがあったことに由来する。大学名の「国立」の読みは「くにたち」であり、しばしば誤って「こくりつ」と読まれ、私立大学ではなく国立大学や国立音楽院と誤解されることがある。

※3 声明 … 仏典に節をつけた仏教音楽のひとつで、儀礼に用いられる。

※4 清水 脩（しみず おさむ、1911- 1986年） … 日本の作曲家。カワイ楽譜（現・カワイ出版）元社長。大阪府大阪市天王寺区出身。大阪外国語学校（新制大阪外国語大学の前身、現・大阪大学外国語学部）のフランス語科を卒業後、1938年（昭和12年）に東京音楽学校（現・東京芸術大学）選科に入学、橋本國彦に作曲、細川碧らに理論を学ぶ。合唱曲「月光とピエロ」等は中・高等学校でもよく歌われている。

※5 東京芸大 … 前身は官立の旧制専門学校「東京美術学校」と「東京音楽学校」であり、日本で最も歴史ある芸術分野の最高学府である。1949年（昭和24年）5月、国立学校設置法（昭和24年法律第150号）の公布施行に伴い、「東京美術学校」と「東京音楽学校」が統合され、新制「東京芸術大学」（東京藝術大学とも表記）として設立された。

※6 岡崎光治（おかざき みつはる、1935年 - ） … 日本の作曲家・指揮者。日本作曲家協議会会員、日本電子音楽協会理事、仙台電子音楽協会代表、仙台作曲家集団所属、宮城県芸術協会参事、NHK 仙台放送局合唱団音楽監督。

※7 福井文彦（ふくい ふみひこ、1909 - 1976年） … 日本の音楽家・作曲家。特に東北地方に「校歌」など多くの楽曲を残した音楽家の一人である。

※8 荒井富雄（あらい とみお、1947 - ） … 1981年4月から1992年3月まで、宮城県仙台向山高等学校の音楽科教諭として教鞭を執る。その間、同校吹奏楽部顧問として指導、1988年から1991年まで4年連続で全日本吹奏楽コンクール全国大会に導いた。現在はアマチュアの吹奏楽団指揮者として活躍。平成29年度宮城県芸術選奨受賞・

※9 高田三郎（たかた さぶろう、1913 - 2000年） … 日本の作曲家。自作を中心に指揮者としても活躍した。合唱曲「水のいのち」などが有名。

※10 芥川也寸志（あくたがわ やすし、1925 - 1989年） … 日本の作曲家、指揮者。JASRACメンバー。文豪・芥川龍之介の三男。多くのジャンルの作品を手がけ、映画「砂の器」の音楽などの作品がある。

※11 ノーブル noble … 高潔な、気高い、崇高な、りっぱな、称賛に値して、りっぱで、堂々とした、壮大な、見事な、すばらしい